
気分屋魔術師 [幼少期編]

及川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

気分屋魔術師 「幼少期編」

【コード】

N0290Z

【作者名】

及川

【あらすじ】

この世界には魔法が存在する。

0話 11の世界について(前書き)

レイアウト等、投稿してから気付く事も多いと思うので、手直しは多く入ると思います。

不定期更新で、のんびりやっていければいいなと考えています。

0話 この世界について

この世界には「人族」「エルフ族」そして、「精霊」と「魔物」が存在します。

まずは人とエルフ。

人とエルフは生活領土が分かれており、どちらも王政をとっています。

もちろん移住などは可能です。

二種族の違いは、見た目の違いくらいでしょうか。

エルフの方が少し耳が尖っているのが特徴でしょう。

言語、通貨などは統一されており、不便はありません。

次に精霊。

精霊は、いたるところに存在しますが、目には映りません。

世界の概念となっていていとも言いましようか。

手で触れたり、干渉することができない。それが精霊。

人とエルフの中には、精霊と交感することができます。

そのような者たちは多く居ません。ほんの一部です。

その一部の者達は精霊に呼びかけることで、魔法を扱うことができます。

魔法の威力、効果などは扱う人により異なります。

人よりもエルフの方が精霊との交感を得意とする者が多くいます。

フォローを入れると、人はエルフよりも剣の扱いに長けている者が多いです。

最後に魔物。

魔物は様々な動物のことを指します。

おとなしい魔物、凶暴な魔物、すべて包めて「魔物」です。

人やエルフは生きるために狩りをします。
そんなとき、どんなにおとなしい動物でも抵抗することでしょう。
なので、一括り。

簡単にはありますが、これがこの世界の常識。

0話 この世界について（後書き）

読んでいただきありがとうございます。
感想等、お待ちしております。

1話 0歳 生まれた時から特別な

「この子を、頼みますね」
声が響いてきた。

それは、僕が生まれる直前のこと。

両親の声でも、産婆の声でもない。

初めて聞く声だったが、それはとても心地よく、
意味も理解できる不思議なものだった。

次に僕の両親の声

「母さん、よく頑張った！ハハツ、可愛い男の子だ！」

父は興奮した様子で、母はホッとした表情をしていた。

「ん！？母さん！アリアの手の甲に何かが…これは…痣？」

「はあ…はあ…アリア…良い名前ね…大丈夫よアナタ…その子はきつと…精霊様の祝福を…受けたんだわ…」

「精霊の祝福？それは…？」

父は続きを待った。

「声がね…聞こえたのよ…」

「声？」

「そう、声…アリアに何かを、頼んでみたいね…」

「精霊が！？…。さすがは私たちの子つてところか。将来が楽しみだな、母さん」

「もう、アナタったら」

二人は暖かな表情で、元気に泣くアリアを見つめるのだった。

2話 5歳 日常と秘密と幼馴染（前書き）

幼少期編はどんどん年齢を重ねていきます。

いきなり飛ぶので、サブタイトルで年齢を確認しながらの方がいいかと思います。

2話 5歳 日常と秘密と幼馴染

意識を集中する。

自分が作り出したいモノ、やりたいことを明確に、イメージする。そして、自身の中にある「力」を少しだけ開放する。

「加速」

言葉にするのは、イメージを固定化し易いから。

慣れれば必要無いもので、すでにその域まで達しているのだが、鍛錬中なので基本的に忠実にしている。

風を纏ったアリアは、自宅の広い庭を駆け巡る。

庭には多数の障害物を設置してあるが、今ではもう、あつて無いようなモノとなっていた。

アリアは今、日課となっている鍛錬を行っている。

魔法を行使する練習、制御する練習、そしてこれは体力作りにもなっていた。

魔法を使うのには精神力と体力も必要となっている。

すべてをカバーできる、良い鍛錬方法だった。

持続魔法を使っているので、常に疲れが溜まっていくはずだが、10分たつてもアリアは涼しい顔をしている。

急停止、急加速、サイドステップなど動きに変化をつけ、さらに10分。

さすがに疲れを感じて、アリアは止まった。

「だいぶ動きは良くなったな。得意な系統魔法だから上達も早いのかな？」

ニツと笑いながら男が近づいてくる。

「父さん、これでも僕、体力作りをちゃんと、やってるんだからね！」

男：アリアの父に向かい、ちょっと拗ねた様子でアリアは言った。

「ハハツ、わかっているよ。毎日欠かさず鍛錬しているものな。偉

いなアリアは」

ガシガシと髪を撫でられる。

「ちよつ、痛いって！髪が抜けるー！」

涙目になりながら父の手から逃げ出す。

「悪かった、悪かった。さて、そろそろ朝飯の時間だ。汗を流して来なさい」

うう…わかった。と答えて、シャワーを浴びに向かう。

「アリア、風魔法は他よりもだいぶ上達したと思うが、次は何の練習をするんだ？」

食卓を囲みながら、父さんが聞いてきた。

「ん、僕、もつと風魔法がうまくなりたい！風がとても気持ちいいし！楽しいし！」

「そうなの、アリアちゃんは風魔法が好きなのね。ふふつ、頑張りなさい」

母さんがにこやかに話しかける。

「うん！僕、父さん母さんみたいな魔術師になりたいから頑張る！」

「あらあら。アリアちゃんなら、私たちなんかすぐに追い越せるわよ」

「自分の子供に負けたくは無いが…。うむ、アリアは頑張り屋だし、きつとすごい魔術師になるだろうな」

自慢の息子を持った。と二人は喜ぶのだった。

夕方近く、食後のお昼寝をしていたアリアは目を覚まし、起きてくる。

そこで、アリアが起きるのを待っていたのか母さんが

「アリアちゃん、これからお買い物に行くけど、行く？」

と聞いてきた。

もちろん答えは、

「行く！」

「それじゃ、いつもの手袋をしてきてね」

「うん！」

家の外に出るときはいつも手袋をする。

生まれた時は痣のようだったソレは、今では紋章のような形に見える。

そしてこの紋章は、あまり人に見せないようにと言われていた。

昔からなので、とくに疑問も持たず素直に従うアリア。

家から20分弱歩くと、（アリアを連れての移動のため少し時間がかかる）

それなりに大きい町に着いた。

「まずは、パンを買いにいきましょうか」

手を繋ぐアリアに声をかけ、いつも行くパン屋に向かう。

カランカラン

「いらつしゃーい。あら、こんにちは。今日はアリア君も一緒なんですね」

この人はパン屋の店長。

「こんにちはー」

挨拶を済ませ、店内の隅にある椅子に座り、母さんの買い物が終わるのを待つ。

話が長くなるのはいつものことだ。

外で遊んでこようかなーと考えていると、

「あ、アリア君！こ、こんにちは！」

と、部屋の奥から挨拶をされた。

声のした方を向くと、同じ年くらいの女の子が立っていた。

「こんにちは、セリナちゃん。母さんの買い物、もう少し時間がかりそうなんだ。ちょっと遊ばない？」
と、提案する。

「うん！今日は何を見せてくれるの！？」
駆け足で近づいてくるセリナ。

セリナはアリアが魔法を使うことができるを知っている数少ない人間だ。

以前、泣いていたセリナをなだめるために魔法を使ったことがある。珍しさからか、それとも不思議なものを感じたのか、それ以来、アリアに懐いている。

魔法のことは、他の人に言わないようにお願いしてあるし、セリナは約束を守るいい子でもあったので、二人の秘密ということ
で、

たまに魔法を見せていたりする。

「んー…あ、そうだ。できるかわかんないけど…外に行こう！」
良いアイデアが浮かび、テンションの上がるアリア。

「母さん！セリナちゃんとちょっと外行ってくるね！」

「あまり遠くに行っちゃダメよ？気を付けてね」

「うん！」

セリナちゃんと店の裏側に来て、辺りに人がいないことを確認する。
そして、

「それじゃ、始めるよ」

アリアが声をかけ、セリナはワクワクした様子で何が起ころのか見
ている。

両手を受け皿みたいな形にして、魔法を使ったため集中するアリア、
内にある力を開放し、魔法を発動させる。

言葉を発しないのは、女の子の前ということ、恰好をつけたいか
ら。

これから使う魔法は簡単なものなので、言葉を使わなくても十分扱
える。

魔法を使用した結果、アリアの手の上には水が玉のような形で浮かんでいる。

それを見ただけでセリナは興奮している。

「こっからが本番ね！」

アリアは続けて風魔法を使い、水の玉を霧状にする。

キラキラと舞う水の粒は夕日の光を受けて、とても綺麗だった。

「…すごい、綺麗」

セリナはその光景に見入っていた。

「うん、綺麗だねー。綺麗なんだけど…」

『…本当は虹を作れたかったんだけどなあ…』

とアリアは納得しない様子で、

『あとで何がいけなかったか、調べよう』

と心にメモをするのだった。

しばらくして、母さんが迎えにきた。

他の食材も持っていたので、遊んでいるうちに買い物を買わせてたらしい。

「アリアちゃん、そろそろ帰りましょうか」

「はい。それじゃセリナちゃん、またねー」

「うん！また遊びに来てね！」

簡単な挨拶を交わし、アリアは母さんと家に帰るのだった。

3話 6歳 夢の中での出会い

僕は今、夢を見ている。

夢だということは分かるが、なんだか意識がはっきりしない。

近くに何かがいる気配を感じるけれども、何も考えることができない。

「……………」

その『何か』が僕に語りかけているのか、ずっと僕のことを見ている。

「……………」

いつ終わるか分からない夢の中で、その『何か』は変わらず側にいて、

こちらを見ている。

なんだろう、だんだんと元気が無くなってきたように思えるのは僕の気のせいだろうか？

姿ははっきり見えないし、何を言っているのか理解することもできないのに…

その『何か』が悲しい思いをしていることを、心で感じることできていた。

だから、

「かな…しまない…で…」

と、

薄れる意識の中、『悲しまないで』と、一言だけ、一言だけだけれども、

自分の伝えたいことを、言葉にすることができた。

朝目覚めて、

『不思議な夢だったなあ…』

程度に夢の事を思い、いつものように朝の鍛錬へと向かった。

4話 6歳 さらに上を目指して

「おはよう、父さん」

「ああ、おはよう。さて、今日は何をしようかね」

毎日の鍛錬で、アリアの魔法を使う技術は格段に成長していた。

それは、稀有な才能もあったが、努力したからというのも大きかった。

まだ荒さは残るものの、両親が教えられることは一通り習得している。

「んー、父さんみたいに中級魔法をもっと上手に使えるようになりたいんだけど…」

中級魔法は使える、けれども威力も効果もまだまだ未熟で、不満を持っていた。

一般的に、魔法補助具なしで中級魔法を扱えるようになるまでには、20年ほど年月が必要だと言われており、

それを6歳で習得したアリアは周りから見れば異常なのだが、

両親は出生時の事もあり、納得できていた。

「そうか。ならば一度、補助具を使って感覚をつかんでみるか？」

補助具とは、魔法を使用するとき、術者にかかる負担を軽くし、

術者自身の魔法力を一時的に増幅させる働きがあるため、

素の力より強い魔法を扱うことができるようになるモノのことを言う。

また、補助具は希少で高価な物が多く、所有している人は少ない。

「補助具は使わない。僕の手だけでなんとかしたいから」

「まあ、そう言うと思ってたけどな」

ハハツと笑い、アリアの頭に手を置く。

「いいかアリア。人には得意、不得意としている系統があることは知っているな？父さんが見る限りだが、アリアはまだ中級魔法を中級魔法の威力相当に当てはめて発動できていないから、違和感を感じ

じ、上手く扱えていないと悩んでいるんだと思う」

「父さん、それってどういうこと？」

「アリアは風系統が得意だよ。得意な風系統で中級魔法を普通に扱えるレベルということは、風系統以外だと、中級魔法を扱うにはちよつと時期が早いと考えることができるよね」

「ああ！そうだったのか！それじゃあ、他の系統の練習をもっとすればいいんだ！」

補助具に頼る。諦める。という選択肢は無かったようだ。

「そういうことになるね。うーむ、しかし困ったなあ。これ以上、父さんたちでは効果的な鍛錬の方法が思い浮かばないぞ」

「？いつも通りの練習をすればいいんじゃないの？」

「アリアは十分すぎるくらい基礎をこなし、身につけることもできたから、もう今までの方法では得られるものが少なくなる頃だと思うんだ」

「そっかあ。んー、どうしよう…」

父さんを真似て腕を組み、考えるポーズ。

父さんは笑いながら

「アリアが本気で魔術を習いたいと言うならば…町にいる父さんの先生に指導を頼んでみようか？」

「先生？」

「そう、父さんが学生の時にお世話になった人だよ」

「怖くない？」

興味はあるが、知らない大人の人ということで、少し腰が引けている。

「…今はもう怖くないよ。とても優しいおじいちゃんさ」
アリアはどうしようか悩みに、悩んで

「父さん、先生に魔法を教わってみたいです」
と答えた。

5話 6歳 魔術の先生

数日経ち、先生との約束の日になった。

父さんと一緒に、町の一角にあるちよつと大きな屋敷を訪ねる。出迎えてくれたのは侍者だろうか。

「お待ちしておりました。どうぞこちらです」

と言って、二人を奥へと案内する。

通された部屋の中には、椅子に座った一人の老人がいた。

「アレイス先生、本日は時間をとっていただきありがとうございます」

父さんの発言から、この人が父さんの先生だということ把握するアリア。

「うむ、構わんよ。かわいい教え子の頼みだからね。それで、その子が君の子供かね？」

「はい。さあアリア、挨拶しようか」

「アリア・クロイツです。初めまして」
ペコリと頭を下げる。

「ああ、初めまして。私はアレイス・コルク。うむ、なかなか礼儀正しい子供だの」

「私たちの自慢の息子ですから。先生、本題に入りたいと思うのですが、よろしいでしょうか」

事前にアリアに魔法を教えて欲しいという事を伝えているので、今日来た理由を省く。

「うむ。その歳で魔法を扱うことができるのだろうか？たいしたものだよ。そうだな、まずはアリア君、君の力を測らせてくれ。この装置の上に手を置くだけでいいから」

机の上にあった水晶玉みたいなモノの事を言っているのだろう。

アリアは頷いて手を乗せる。

アリアの目には何の変化も映らなかったが、アレイスはふむふむと頷いている。

その様子から、魔法でも使っているのだろうと見当をつける。

「先生、また新しい魔法でも開発したのですか？」

父さんの言葉『魔法の開発』と聞いて、アリアはびっくりする。

新しい魔法を生み出すことができる人は希少な存在で、

世界でも数十名しかいないと聞いたことがあるからだ。

アレイスはアリアの反応を見て、この装置の安全性について説明をしていなかったことに気づく。

両者の間には少し誤解があったが、この誤解は解けることがなかった。

「ああ、これはだね、手を置いた者の現在の力を視る事ができるのだよ。痛みとかは無いから安心してくれ。まあこれは、少し特別なモノだから、私以外使えないがね」

「また、すごいものを作られましたね…それで、どうでしたか？」

「うむ、既にDランクほどの実力を持つておるみたいじゃないか」

魔術師は実力に応じてランク付けされる。

ランクはA～Fまでの6段階で分けられており、大体の目安が

A 〓 王宮魔術師 B 〓 一流魔術師 C 〓 二流魔術師 D 〓 三流魔術

師 E 〓 新米魔術師 F 〓 魔術師見習い

となっている。

アリアの年齢ではF以下、つまりランク外が普通。

「ふむ、おもしろい！少し面倒を見ようじゃないか！」

アレイスはにこやかな笑みを浮かべ

「アリア君、これからよろしくな。私の事は先生と呼んでくれ」

と、改める。

「はい！よろしく申し上げます。先生！」

アリアは元気良く頭を下げた。

「先生、ありがとうございます。アリアをよろしく申し上げます」

「ああ、任せなさい。そうじゃな、稽古は明日から始めるとしよう

かの
」

その後はこれからの予定などを話し合った。

元々、子供が好きで先生になったアレイスは、

アリアともすぐに仲良くなった。

屋敷を案内してくれた侍者のウエルさんも良い人で、

アリアはこれからの日々が楽しみで仕方がなくなった。

5話 6歳 魔術の先生（後書き）

今回も読んでくださりありがとうございます。

それと、評価ありがとうございます。
初めての評価なので、嬉しいです。

6話 9歳 きっかけは些細な事

アレイス先生の指導を受けて3年が経とうとしている。

この3年で様々な事を学び、驚異的なスピードで技術を吸収していくアリア。

そして、少し前からアリアは剣術も教わっている。

きっかけは些細な事、町の外で魔物と戦っている人を見て、かっこいいなと思ったから。

剣術を学びたいとアレイス先生に相談したところ、心当たりがあるということ、

実現するに至った。

今では、午前は剣術の稽古、午後は魔術の稽古、と忙しい毎日を送っている。

さらに数ヶ月。

小さい時から体力作りをしてきたおかげもあり、剣術の腕もだいぶ上がった。

この成長っぷりには剣術の師匠である、ベーンさんも驚いていた。

ここから3年間、アリアはひたすらに技術を身につけていった。

7話 12歳 少女の世界(前書き)

いきなり年齢が飛んでいます・・・

7話 12歳 少女の世界

『ここは、どこだろう?』

周りを見渡し、アリアは不思議に思う。

なぜか、知らない草原の中で大の字で寝ていた。

わけが分からず、昨日の記憶を辿る。

昨日はベーン師匠と模擬戦を行い、アレイス先生の屋敷の地下で、独自の魔法の研究を行って…

自宅についてからは、父さん母さんと食事をとって、寝たはず。

寝たはずなのだが…

『ここ…どこだ?』

と首をかしげる。

「起きた?」

突然、背後から声がかけられて、アリアはビクツとしつつ、素早く振り向く。

そこに立っていたのは、かわいらしい少女だった。

気配を感じることができなかったので、警戒しながら尋ねる。

「…君は誰だい?」

「…私の言葉、聞こえていますか?理解できますか?」

少女はこちらの質問に答えず、質問をしてきた。

その、どこか悲しそうな雰囲気に覚えがある気がしたが、思い出すことはできなかった。

「…大丈夫、聞こえているし、理解もできる」

「…」

俺の返事を聞く前から、少女の目は潤っていた。

返事を聞いてから、涙が溢れでる。

アリアは意味が分からなかったが、自分が泣かせてしまったと思い。

「ごめん！俺が何かしたなら謝るから！泣かないでくれ！」
と頭を下げる。

少しして、少女は落ち着きを取り戻したようだった。
そして、

「また会えて、お話しすることができて、私は幸せです」
と、可憐な笑みをアリアに向ける。

物覚えが良いはずのアリアだが、この少女が誰だか分からなかった
ので、

「ごめん！君は俺の事を覚えていてくれたみたいだけど、えっと…
俺たちどこで会ったっけ？」

正直に聞くことにした。

少女は少し悲しそうな表情をするが、
「覚えていなくても仕方ありませんね。もう6年ほど前になります
から…」

と言った。

『6年前？』

何かがひっかかる。6年前というキーワード、それとあの雰囲気…
少女が続きを口に出す前に、

「…夢の中で、昔、一度だけ会った気がする？」

自分でも夢で会ったと言うのはおかしな気がしたが、それが答えだ
った。

「…覚えていてくれたのですね？」

またも泣き出しそうな少女をなだめ、

「いや、今まで忘れていたよ。ごめん」

と、謝る。

「いえ、思い出してくれただけで十分です。あの時のあなたは、す
ごく頑張りましたから」

何を頑張ったっけかな、と疑問に思い、黙っていると

「そういえば、ここの事をまだ何も説明していませんでしたね」

「あー、そうだったね」

大事な事を思い出し、二人して笑った。

「遅くなりましたが自己紹介を…私の名前はルルって言います。そしてこの空間は、夢であって、夢ではないところ」

「んん？夢じゃないの？」

「半分は夢ですが…ここは、私が存在するために作られた世界で、あなたが私に会うためには夢を利用しなければなりません。なので、夢のように思えますが、これも本当の世界の一つなのです」

「ごめん、さっぱりわかんないや…」

「わからなくても大丈夫です。私はここにいる。それだけを知っていてもえれば…」

ルルの表情がまた曇り出した。

「どうしたの！？またなんか俺、やっちゃった!？」

「いいえ、すみません…また会えて、お話もすることができたのに…まだ、迎えの時ではないことが分かってしまったので、少し悲しくなってしまうました」

『迎えの時?…』

ルルは顔を上げ、

「でも、私、ずっと待ってますから」

と、無理に作った笑顔をこちらに向けてくるのだった。

ルルの言葉の意味を理解することはできなかったが、自然に、今やるべきことが思い浮かぶ。

ルルの頭に手を置き、

「悲しまないで、俺、頑張るから」

と微笑む。

やるべきことをやったからだろうか？

意識がだんだん遠くなってきた。

「ああ…夢の中なのに眠くなってきた…」

眠気の所為か、崩れ落ちそうになったアリアを抱き支えて

「またね、アリア…私はいつまでも待っていますから…」

と、ルルは囁くのだった。

8話 12歳 気持ちの変化

「ほら、どうした！攻撃してもいいんだぜー！」

相手は、ハハハハハ！と、楽しそうに木刀を打ち込んでくる。

カンッ！カンッ！

と木刀同士がぶつかり合う音が周りに響く。

今は剣術の稽古中。

相手は剣術の師匠であるベーンさん。

腕は一流だが、勝負が好きで、熱くなると少々人が変わってしまっ節がある。

アリアが対応できるギリギリの早さで打ち出される剣戟。

捌くので手一杯で、攻撃に移ることができない。

たまに隙を見せてくれるのは、稽古中だからだろう。

そのチャンスを逃さず、攻撃をしかける。

両者、疲れというものを知らないのか、傍から見たらハイレベルな攻防が10分もの間続いた。

突然、ベーンは素早く身を引き、距離をとる。

木刀を下げ、

「ところでアリア、昨日とは雰囲気が違うが、何かあったのか？」と聞いてきた。

普段通りだと思っていたアリアは、指摘されてびっくりする。

「そう不思議そうな顔すんなんて。俺はお前のお師匠様だぜ？そんなくらい分かるわ」

3年の付き合いだからか、人の心情を読むのがうまいのか判断に困

るが、

「あー…そんな違いました？」

と、回答をぼかす。

可愛い少女と夢で会い、気合を入れ直したなんて、恥ずかしくて言えなかった。

「そうだな、普段よりも眼つきが鋭かったのと、お前なんてすぐに追い越してやるぜ！…ってのがすげー伝わってきたからな」

「まあ…思っていないとは言いませんが…」
苦笑いを浮かべ

「そうですね、気合が入っていることは確かです。はあ…バレてしまったみたいなんって言わせてもらいますが、俺はいつか師匠を越えてみせますよ」

と7割本気の残りが照れ隠しで宣言した。

「おお！言うねえ！楽しみだねえ！！だが、まだまだ子供にや負けらんねーよな！」

ハッハッハと本当に楽しげに師匠は笑った。

その後、再開された稽古ではいつも以上に剣戟の速度が早かった。

『まだまだ越えれそうにないなあ…』

とアリアは思うのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0290z/>

気分屋魔術師 [幼少期編]

2011年12月8日01時55分発行